

「不許冠職入山門」

東急株式会社 代表取締役会長
野本 弘文



東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第5回は、東京フィルがフランチャイズを結ぶBunkamuraオーチャードホールの経営母体であり、2022年に100周年を迎える東急株式会社 代表取締役会長の野本弘文様です。

東急グループが誇るゴルフ場、茅ヶ崎にある「スリーハンドレッドクラブ」には、論語の「不許葷酒入山門（くんしゅさんもんにはいるをゆるさず）」を模した「不許冠職入山門」という言葉を標柱に掲出しています。これは東急グループ五島昇元会長が注力し手掛けたもので、「地位も年齢も関係なく交流しましょう」という意味を持ちます。

この言葉はゴルフ場に留まらず、東京フィルがフランチャイズとして演奏しているオーチャードホールのあるBunkamuraにも共通すると思っています。

私は、若いころはそれほど熱心に演奏会に足を運んではいませんでした。ここ数年はオーチャードホールで東京フィルを聴く機会をたくさん持つようになりました。

はじめは敷居の高そうな印象がありましたが、頭をまっさらにして音の圧や立体感を身体で感じながら聴いたり、演奏者による解説や映像付きで楽曲の背景が分かると自分なりにストーリーやイメージを膨らませながら自由に楽しめる魅力を感じています。

個人的にも毎年楽しみにしている公演はやはり「東急ジルバスターコンサート」です。テレビ東京で生中継いただき、東急グループとして大晦日の風物詩に育て上げたいと力を入れています。

2018年のロシア交流年には世界的なバレエダンサーのザハーロワさんとヴァイオリニストのレーピンさん夫妻に共演いただいたり、2020年末の公演ではミュージカル『レ・ミゼラブル』の歌を司会の別所哲也さんと視聴者投稿映像で合唱したりと、多くの方に楽しんでいただけるよう趣向を凝らしています。

カウントダウン曲は、演奏が進むにつれ客席でも緊張が高まり、終曲と同時に新年を迎えると、舞台と客席が一体となり、達成感や喜びで劇場が満たされます。

終演後にお客様の嬉しそうな感想が耳に入るのも楽しみのひとつです。帰路につくのは深夜遅くですが、新たな年を迎え、今年も多くの方々に喜ばれる仕事を続けていこうと気合が入ります。

東京フィルはオペラやバレエから、ジャズや映画音楽、ポップスまで幅広く演奏されるので、耳なじみの曲に出会う嬉しさや、その意外な魅力を発見する楽しみもあります。表題の言葉は、音楽ジャンルに囚われず交流しましょう、と解釈することもできそうです。



野本弘文(のもと・ひろふみ)

1947年福岡県生まれ。1971年早稲田大学理工学部卒業後、東京急行電鉄株式会社(現:東急株式会社)に入社。2004年イツツ・コミュニケーションズ株式会社取締役社長、2008年東京急行電鉄株式会社専務取締役、2011年同社代表取締役社長、2018年同社代表取締役会長(現任)。2017(平成29)年より公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団理事。

東急株式会社様は、2022年に創立100周年を迎えます。創業以来、鉄道を基盤としたまちづくりを中心に、事業を通じた社会課題の解決に取り組んでこられました。現在においても、「美しい時代へ」というグループスローガンのもと、“サステナブル経営”を基本姿勢として事業を推進されています。